

## 南海電車とのエピソード

郭 佳夢

教育学部 日本語・日本語文化研修留学生 中国

和歌山県。日本語専攻の学生でありながら地理の知識が乏しい私にとって、なじみのあるような地名ではない。交換留学生として和歌山で一年間の留学する機会が与えられた時に喜びと期待の気持ちが湧いてきたのも、和歌山が日本にあるからなのだ。そのときにひたすら思ったのは、必ずこの一年の時間を利用して自分の日本語能力を鍛えることで、もう少し大きくいうと、できるだけ多くの友達を作り、視野を広げ、留学の機会を無駄にしないことだった。

そのときの私は、この未知の土地で何が起こるのか、そして未来の私のこの土地に対しての気持ちがいかに変わるのか、何も分からなかった。

人生で初めての海外への飛行機にのり、どきどきした不安な気持ちを抱えながら、日本の土地に着いた。和歌山行きのバスに乗って和歌山に向かう途中、窓外の風景をこころに刻むように目を大きくあけてみていたら、なんとなく、目に映った景色が頭の中で想像した日本とだんだん重なってきた感じもしていた。それは、美しく、希望と憧れに満ちた景色だった。

唯一残念に感じたのは、和歌山へ行く途中に電車に乗れなかったことだ。

日本にきたばかりの私は、すぐ和歌山の電車に興味を抱くようになった。実は、日本に来る前に、JR電車は耳にしたことはあるが、地方私営の電車と地下鉄についての知識はほぼゼロだった。そのため、和歌山の南海電車のことももちろん何も知らなかった。

住まいは学校近くのマンションにアレンジされ、大学から徒歩10分で行く距離にある。学校に行くのは便利だが、出かけるのは不便なのだ。学校は山にあるため、中心市街、もしくはほかの町に行きたいなら、一番便利な交通手段はバス、あるいは電車である。来たばかりのころのわくわくした気持ちを抑えられず、どうしても大都市に行ってみようという衝動で、私は人生初で初めてなんば行き南海電車に乗った。きっぷを買うときにこのようなエピソードがあった。初めて日本の電車に乗るため、運賃表や買い方に少々困ったあげく、機械の前で戸惑いながらうろうろしていた私を目にしたあるおばあさんが微笑みながらわたしたちの前に立っていた。私は緊張しながら片言で今の事情を説明すると、そのおばあさんは関西弁の独特なイントネーションで説明して助けてくれたのだ。今振り返ってみると、おばあさんの言葉は半分しか分からなかったが、その熱心に説明してくれたおばあさんの言葉と気持ちすべてが私の心に届いたのである。

南海電車に何度も乗った今でも、電車の中で必ずやることがある。みさき公園から発車したあと、電車は青く広く澄み渡った海に寄り添い、いつものスピードで走り続ける。晴れた日に、海面は太陽の光にやさしく撫でられ、無数のダイヤモンドのようにキラキラ光るのだ。このように、一層静かに見えた海は無限に広がる空と一緒に、一生忘れられない素敵な絵になったのだ。絶景を目の前にした私は、いかに眠くても、この瞬間の美しさと感動だけを頭の中に刻むようにじっと見ている。どこへ行こうとも、南海電車に乗ってこ

の景色を目にするたびに、心の底から得も言われぬ感動が浮かんでくると同時に、「和歌山でよかった」と、どこからかこのような声が心に届いた。和歌山にきたから南海電車に乗れた。南海電車に乗れたからこのような偶然でありながらも美しい出会いがあったのだ。

南海電車に乗ったということは、どこかの遠い場所に行ったはずなのだ。もちろん帰りの時間もだいぶ遅くなり、十時や十一時などは普通である。最初は、「こんな遅い時間だと電車の中は絶対空だよ」と思っていたが、ホームにきたら驚いた。依然として、缶詰のような満員電車であった。席についてゆっくり休めるどころか、息も軽く苦しくなるほどの状況なのだ。周りをみれば、ほとんどはスーツを着てネクタイを締めているサラリーマンたちで、顔に浮かんでいる疲労感は隠せない。そしてこのような経験のなかで、一番印象深いのは、意識も失ったぐらい酔った正装姿の女性が、同僚たちに支えられて電車を降りたことであった。偶に出かける時間はラッシュアワーとかぶるようなこともあり、緊張感溢れて無表情の顔で一刻でも早く改札口を通りたい人々を目にした私は、なんとなく自分の気持ちもその緊張感に染められ、疲れていないのに疲れた感じがするのだ。

この足速い世界の中に生きているわたしはこの世界の素晴らしさを実感したと同時に、偶に少し疲れたなど、感じたことがあった。

だが、なんば駅の人ごみを掻き分け、最終の南海電車の駅にたどり着くたびに、灯台に道を照らされ、家への方向を導かれているように心が落ち着く。和歌山に来て早くも9ヶ月になった。親切な先生たちに出会い、支えあう友達に出会い、さらにやさしく助けてくれた名も知らぬ人々たちにも出会い、和歌山は私にとってもはや日本でのふるさとのような存在である。日本に来る前に立てた目標はまだ全部達成していないかもしれないが、今の私は胸を張って「和歌山でよかった。そしてこの一年間は何の後悔もなく過ごした」と堂々と言える。南海電車は私を連れて遠くの場所に行き、そして私を連れてここに戻る。南海電車は私にとってまさに和歌山の存在のようで、わたしとその広々とした世界をつなげる架け橋であり、私と外の世界の間で運行する最終時間のない列車である。

高い階段をのぼり、目の前に広がったのはグレー色の電車の群れ。その一瞬で疲れた心はどこかへ飛んでいった。その理由はほかでもなく、ただ、その長き道の先に、私の家と家族がまっていることが分かっているから。



## 和南海电车之间的小故事

郭 佳梦

和歌山县。这是一个对于我这样虽身为日语专业却地理知识贫乏的外国人来说，不甚熟悉的地名。当得知我将要作为交换留学生在这里进行一年的交换留学时，感受到的喜悦和期盼之情也是出于对日本这个国家的憧憬。而对于和歌山这个地方，却是毫无概念。那时心里所想的，无非是要好好利用这一年的时间来锻炼自己的日语能力，再说大一点，最好能多交一些朋友，扩展自己的视野，不白白浪费这么大的留学机会。

那时的我，对于要在这个未知之地上发生的事情，以及未来的我对这个地方的认知和感情会发生巨大变化的事，还一无所知。

乘坐着人生中第一次飞出国土的飞机，我抱着一颗忐忑不安的心踏上了日本的土地。乘坐着巴士去往和歌山的路上，我睁大了眼睛望向窗外飞驰而过的风景，渐渐的和我脑海中所描绘的那个日本重叠了起来。一切都是那么的美好，充满了期望与憧憬。

唯一的一点遗憾就是，去和歌山的途中没有坐成电车。

刚来日本时的我，对和歌山的电车产生了极大的兴趣。来日本之前，只对 JR 这类的国营电车稍有耳闻，对地方性私营电车和地下铁是一概不知的，所以说对于和歌山的南海电车也是毫无所知。

住的地方安排在了离学校很近的公寓，上学时也是不紧不慢地走十分钟就到了。上学是方便了，出行就有点不便利了。由于学校在山上的缘故，想要去到市里或者其他的城市的话，最方便的途径便是巴士或者电车了。初来乍到，想要去大城市看一看的我第一次坐上了开往难波的南海电车。买票时还闹了个小插曲，因为是第一次坐电车，不太会看价格表也不知道该怎么样买才好，在机器面前踌躇着的我尴尬地徘徊着。也许是听到了我和朋友之间中文的对话，有一位稍稍上了岁数的阿姨微笑着问我们需不需要帮助，紧张的我用拼凑的日语解释了我们的情况之后，那位阿姨微笑着用关西腔告诉了我们应该怎么做。虽然有一半没有听懂，我们依旧装作懂了的样子向她道了谢。

即使是乘坐了无数次南海电车的现在，有一件事我也是一定会做的。在 Misaki 公园这一站之后，电车会以稍稍倾斜的角度路过一片蔚蓝透亮的大海。这时候不管多困，我也会睁大了眼睛，想要把这一瞬间的美丽和感动深深地印刻在自己脑海里。晴天时，太阳照射在海面上，就如无数宝石闪闪发光散落一地，合着蔚蓝的天空构成了一道最美的风景。不论我要去哪里，每当坐着南海电车看到这一幕时，心中都会涌上莫名的感动，不好的情绪都一扫而光。这时我都会庆幸因为自己来到的是和歌山，所以才会坐到南海电车，才能有幸在无意中看到这么美丽的风景。

坐南海电车的话估计八成就是出门去玩了。先到大阪然后再转乘个什么别的电车前往目的地。等到归途时往往总是夜里的十点，十一点左右。最初在这个时间回家的我抱着“已经这个点了电车里一定很空吧”的想法，上了站台却让我大吃一惊。即使是这个时间，电车上依旧是拥挤的，更别说找个座位坐下了。抱着不满的心情上了车，环顾四周，发现车厢里的基本都是穿着西装打着领带的上班族，脸上的倦容无法遮掩。印象最深的是有一次遇见了一位喝醉酒的上上班族女性失去意识，被四位同事搀扶着下了电车。也有时候出行会不幸赶上上

班的早高峰，看着所有人板着脸带着或紧张或冷漠的神色步履匆匆快速地通过换乘口，我本是出游的心情也会染上一丝沉重和疲倦。有人说日本的电车能在一定的程度上反映日本人的社会和生活，也许从这一点上来说这句话说得也没有错吧。

一天的出行让身体感到疲惫。每当我在难波站顺着上方的指示标找到南海电车站时，总有一种谁在指引着我走向家的感觉。来到和歌山快一年的时间，认识了亲切的老师，有缘分的朋友，甚至还有温柔对待你的陌生人，一切一切，都让我感到这里就像是我在日本的家一样的存在。不论自己来日本之前的目标有没有全部完成，我都可以昂首挺胸地说，在和歌山的这一年，我很充实无悔地度过了。不只是和歌山，还有关西这片土地。南海电车带着我从这里离开，再带着我回到这里，对于我来说，它是连接我与那个更广阔天地的桥梁，是我的家和外界之间永不停运的灰皮车。

走过两段高高的阶梯，出现在眼前灰蓝相交的电车群，让我心中涌起莫名的亲切感，因为我知道，在终点的那头，有我的家和亲人在等着我。

